

新しい質的心理学の方法論を求めて

京都大学大学院教育学研究科教授

やまだようこ

Profile — やまだようこ

1970年、名古屋大学文学部哲学科卒業（心理学専攻）。名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程中退。教育学博士。愛知淑徳大学教授などを経て、現職。日本質的心理学会理事長、日本発達心理学会理事。専門は生涯発達心理学、ナラティブ心理学、質的心理学。主な著書は、『ことばの前のことば』（単著、新曜社）、『喪失の語り』（単著、新曜社）、『私をつつむ母なるもの』（単著、有斐閣）、『*Meaning in Action*』（共編著、Springer）など。



科学とは？——再現可能性をもつ

はじめて心理学を学んだころ、「心理学は科学である」ということばが印象づけられた。私は、大学では知覚心理学と実験心理学を学び、動物の学習実験で卒業論文を書いた。そのころ、今でも繰り返しそこへ戻っては考え直す原点というべき、最も基礎的なことを学んだような気がする。

このごろ私は、仲間とともに質的心理学という新しい学会を立ち上げたところである。これから「質的心理学」の新しい方法論をつくっていきたくて考えている。しかし、質的研究には誤解も大きい。「質的研究だから、私個人の主観でも、恣意的でも、たった1人のデータでも、何でもありでしょうか？」と言われて、「えっ？」と絶句してしまうこともあった。

私は、学問であるからには広い意味の「科学」の範疇で方法論をつくっていく必要があると考えている。しかし、その「科学」ということばを、従来よりもはるかに広い意味で、しかも根本的なものの見方の転換を含んで使うことになる。

それでは、「科学」とは、何を意味するのだろうか？ 学部生のころ愛読した中谷宇吉郎さんの『科学の方法』を本棚から探してみた。情報学も認知科学も大脳科学もなかった時代のもので、今では表紙も茶色に変色している。しかし、科学とは何かという本質的な議論は、今でも生きている。

中谷さんによれば、科学とは「ほんとうであ

るかどうか」を問う学問である。「ほんとう」を問う方法のひとつは、いろいろな人が同じことを調べて、それがいつでも同じ結果になればよい。つまり、科学にとって最も重要なのは、いつ、どこで、だれが見ても、同じ方法でやれば、同じ結果を繰り返すことができる「再現可能性（reproducibility）」をもつことである。

そのころ理学部で化学実験をしている友人に、「同じ手続きで実験をしても同じ結果が出なかったらどうするの？」ときいたことがある。その友人は、こともなげに「繰り返してみればいいだろう？」と言った。「でも、人間の心理現象は、状況や文脈や関係性によって変化してしまったり、一回しか起こらないことも多いのだけど……」とつぶやいてみたが、そのころは答えが出なかった。

再現可能性を得る、いちばん基本的で単純な操作が「測定」と「数量化」であり、それを支えるものが「統計」である。「再現可能性」は、それを「信用」するはたらきとむすびついている。超ウラン元素のように、誰も見たことがないものをなぜ信用するかというと、それが今までわれわれがもっていたほかの知識に、矛盾なくうまく当てはまるからである。

科学は、多数の例を全体的に見る場合には強力だが、全体のなかの個の問題、あるいは予期されないことがただ一度起きたという場合には、案外役に立たない。しかしそれは仕方

がないのであって、科学というものは、本来そういう性質の学問なのである。……科学というものには、本来限界があつて、広い意味での再現可能な現象を、自然界から抜き出して、それを統計的に究明していく、そういう性質の学問である。(中谷 pp.16-17)

質的心理学の再現可能性 —— 省察性

「質の心理学」とは、「広義のことば」を重視する心理学である(やまだ, 2007)。それには「再現可能性」を求めることはできないのだろうか。私は、可能であるし、必要だと考えている。ただし、「測定」「数量化」「統計」という操作を用いることはできない。質(ことば)を質(ことば)で支える「再現可能性」が必要になる。また、再現可能性を保証する「信頼性(reliability)」という用語は、「省察性(reflexivity)」に替わることになる。

質的データの中心は、広義の「ことば」であるが、ことばは数字のように一義化できない。海外の学会へ行つて数で示された図表を見ると、数の普遍的な通じやすさに今さらながら気づかされる。私が研究している「ナラティブ(語り・物語)」など、現地の日常語のスラングが入るので、英語でさえ何を言っているのか簡単には理解できない。ことばを文字通り翻訳するだけではなく、その背景の社会・文化・歴史的な文脈を理解しないと、そのことばが何を意味しているかわからないのである。

ことばは、いろいろな意味で文脈(コンテキスト)にしばられた、ローカルなもので、翻訳の作業をかかえこむ。数字に比べれば、とても不便な記号である。しかし、逆にいえば、それだけ人間の心理現象に密着し、日常生活の文脈を記述するのに適した記号なのである。

例えば「公園にごみが1個ありました。もう1個捨てました」「公園に男の子が1人いました。もう1人女の子がきました」という2つの文章は、数字の操作では同じ $1 + 1 = 2$ になる。意味の乗り物をすべて無視して数だけに着目するので、明快な操作ができる。しかし、私たちが生きている人間世界では、ごみと人間、「捨てる」と「会う」行為の意味を区別する必要が

ある。一元化して数量化する情報だけでは、多様で大切なものが抜け落ちていく。テレビ番組を視聴率だけで、政治を支持率だけで、国の豊かさを経済指数だけで評価できるわけではない。だからこそ、私たちは翻訳の困難を抱え込みながら、ローカルなことばを使っているのである。

数字のかわりに「ことば」を使うと、いつ、どこでも、誰でも同じになるという意味の普遍的な「再現可能性」は期待できない。しかし、ことばも翻訳可能性をもつことから、ローカルな知を重ねあわせて、インターローカルに「共通性」を見出していくことはできる。「再現する(reproduce)」の本来の意味は、再生産することであり、子どもを産むという意味さえある。まったく同じコピーを再生産することは困難かもしれないが、本来の意味で「再生産」する機能を求めていくことはできるだろう。質的研究で使われる「省察性」は、そのための概念である。

科学のもとにある思考様式

—— 「不変」「文脈から独立」という見方

中谷さんは、「モノは、ありのままの実質や実態として存在するのか? 物質とは何か?」という問いも投げかけている。科学は、人間が1人もいなくても、モノは自然界にそのままにあるという素朴実在論の形をとって進歩した。しかし、モノや法則や実態が、自然界にありのまま宝物のように埋もれていて、人間がそれをそのまま発見するというわけではない。自然の実態といわれるのは、科学の思考様式を通じてみた「自然の実態」にすぎないのである。

物質科学も、けっきょくは人間がつくったものであって、そういう一つの学問をつくり上げるには、なにか基盤になるものが必要である。その一つとして物を取り扱う以上、物には実質があつて、その実質は不変であるということにしないと、学問を組み立てる足場がない。(中谷 p.59)

学問を組み立てるもとにある科学的思考様式の一つは、「不変性(永続性・普遍性)」という

見方であろう。物質は、目の前に現にある事実や実態だから、何も説明などいらぬといわれるかもしれない。しかし、物事はそれほど単純ではない。水は凍れば「氷」と呼ばれ、蒸発すれば「水蒸気」と呼ばれ、さらに拡散すれば「空気」に溶けて見えなくなる。現代の科学では、それらを元素に分解すれば、同じ H₂O だと考える。それが眼に見えるか、手で触れられるか、形態がどうかなど、実態にかかわらず、「不変の実質」というものがあるという前提に立っているのである。「不変の実質」にたどりつくには、現実にあるモノ、人間が五感で把握しているモノの水準では達成できない。具体的なモノをさらに細かく分割し分析して、「これ以上分割できない実質」に分けていく作業が不可欠になる。

モノや現象が、いつ、どこで、誰が見ても同じ、つまり時間や空間や観察者などに依存しないで、「不変性（不滅性・普遍性）」をもつと考えるのが、科学を組み立てる基本的なものの考え方である。ホワイトヘッドのことばで言いかねば、それは「時間・空間・文脈から独立して存在しうる」という概念になる。

この考え方の上に、先の「再現可能性」という概念もある。厳密に言えば、たとえ物質でもまったく同じ結果が繰り返されることはない。測定するたびに微細な誤差が出るし、巧みな実験者が運よく手に入れた一回限りの結果もある。しかし、理想的にみて条件が同じならば「不変」と考えるのである。

科学を成り立たせている基本概念は、ことばを成り立たせている概念と、実はそれほど異なるものではない。ただし、その「ことば」は、科学を発展させてきた「西欧語」という限定つきである。心理学の基本用語「個人 (individual)」は、アトム（原子）と同語源であり、「これ以上分割できないもの」、つまり文脈に依存しないで独立して立てる最小の単位を探そうという思想から出ている（やまだ、2006）。個人の「アイデンティティ」は、同一性と連続性で定義されるが、これも「同じで変わらない」ものを求める思想から出ている。個人の「パー

ソナリティ」も、状況や文脈によって変化するものではなく、一貫するものと考えられている。「永遠」の天国を求める宗教も、肉体は滅びても「永続」して生きる「たましい」を求める精神も、「不変」を追求するという根っこは科学と同源である。

文脈のなかでの変化プロセスをとらえる

心理学のような人間科学では、「不変性」を基礎にすると、やっかいな問題も起こる。水であれば、流動体であったものが、氷になって固形物になったり、蒸発して空中に拡散したり、見かけの形態が変わっても、「H₂O」という組成は不変で連続しているという考え方で通すことができる。しかし、人間は同じタンパク質の組成でも、生きているか死んでいるか、見かけの形態が変わるかどうかは、大問題である。また、ある人が死んでも、遺伝子が子どもに伝わってれば、ある種の生命体として連続しているが、死によって肉体が消滅したともいえる。「死」とは何かという問題も、それほど簡単ではない。

生命科学でも基本は同じである。ホヤなどの生命体でふつうに起こる変化を、人間の例に翻訳してみるとどうなるだろう。「スミス氏が病気をすると、体が小さくなり、いろいろな器官がすべて見えなくなる。しかし、病気が治ると、体がまた伸びて、また人間の形態になる。これは先のスミス氏といえるのか、別人なのか。」カフカの小説みたいであるが、心理学では、不変性よりも形態の変化のほうが大問題である。

質的心理学は、人間科学に適した学問を志向している。そこで質的心理学は、従来の科学の基本となるパラダイムを根本から転換するのである。「独立した個」から「相互関係」へ、「普遍」から「社会・文化・歴史的な文脈」へ、「不変」から「変化プロセス」へと重点を移動する。しかし、けっして「科学」から「非科学」へ、「客観」から「主観」へと向かうわけではない。従来の科学（そして西欧哲学や西欧語）の基盤になった、ものの見方を転換させているだけである。

問いの立て方ともの見方

科学というものが培ってきたのは、世界に対する基本的な問いの出し方やもの見方だといえるだろう。新しい問いの立て方やもの見方によって、過去の自己を否定したり、矛盾する領域にも拡張しうる思想、新しい展開を未来に向かって生成していく生き生きした発想を生み出す。それこそ、科学的な思考が私たちに教えてくれた大切な宝物である。

そして、問いの立て方やもの見方そのもの、観察者や当事者自体を鋭く「省察」していく思考法は、質的研究がとくに自覚して磨いてきた方法である。

生命の現象は非常に複雑で、とうていわからないとよくいわれるが、物質でも同じことで、ほんとうのところはわからないのである。急所は問題の出し方にあるので、物質の科学と生命の科学とでは、多くの場合、問題の出し方が違うのである。(中谷 p.175)

理論と予測可能性

科学の重要な役割は、単に仮説を実証するだけではなく、仮説演繹法によって法則をつくり、新しい現象を予測できることである。そのためには、個々の具体的な知識を得るだけではなく、それらを体系化する理論が必要になる。

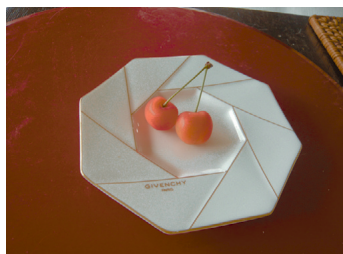
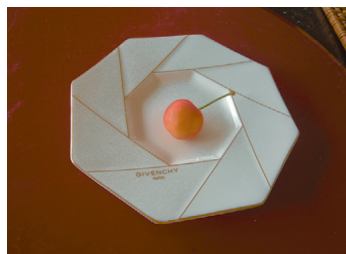
実験によって、もののある具体的な性質、あ

るいは現象間のつながりが知られたとしても、それだけでは学問とはいえない。いわゆる学問の定義の中に入るには、そういう知識に、ある体系が組み立てられなければならない。体系ができてはじめてそれが役に立つことになる。(中谷 p.159)

心理学の実験法や質問紙調査法は、仮説を検証したり統計的推測をするには強力な手法であるが、万能というわけではない。心理学の発展に大きな貢献をしてきた理論家を思い出してみよう。例えば、ダーウィン、フロイド、ピアジェ、ヴィゴツキー、レヴィン、ジェームズ、ハイダー、エリクソンなど、彼らの理論は主に質的方法に基づいて生み出されてきた。それはなぜなのか、改めて考えてみる必要があるだろう。新しい理論を生成したり、想像さえできなかった未来を予測するために、新しいもの見方や発想や理論を生み出すための方法論をつくっていく必要がある。そのために質的心理学は役立つのではないだろうか。

文献

- 中谷宇吉郎 (1958) 『科学の方法』 岩波新書
やまだようこ (2006) 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念：ナラティブ・ターンと物語的自己」『心理学評論』 49, 436-463.
やまだようこ編 (2007) 『質的心理学の方法：語りをきく』 新曜社



学問とは問うて学ぶことである。問いの立て方が最も重要である。

3枚の写真を見て、問いを立ててみよう。

サクランボはいくつあるか？

— 数量的問い方

サクランボは、なぜ「かわいい」か？ しかも、対^ペになると、単独や多数より「かわいい」のはなぜか？

— 新しい発想を生む質的問い方